九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

モンゴル青銅器時代墓制の展開 : ヘレクスール文化の位置づけを中心に

宮本, 一夫
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

https://doi.org/10.15017/1912775

出版情報：史淵. 155, pp.53-80, 2018-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門
バージョン：
権利関係：

モンゴル青銅器時代墓制の展開
―ヘレクスール文化の位置づけを中心に―

宮　本　一　夫

1．はじめに

ユーラシア草原地帯東部すなわちウラル山脈以東の青銅器文化は、ユーラシア草原地帯西部から青銅器文化の伝播によって成立していく。その古いものが紀元前３千年紀のアファナシェボ文化であり、これらが少なくともアルタイまで広がっていく。その後、紀元前２千年紀前半にはユーラシア草原地帯北辺域の森林帯に分布するセイマ・トゥルヴィノ文化と南辺域の草原地帯に分布するアンドロノヴォ文化が併存し、これらが長城地帯へと広がり、複雑な様相を呈する。

モンゴル高原の青銅器時代墓については、紀元前３千紀後半～紀元前２千年紀にかけてを、チェムルチェク（Chemurchek）文化、ムンクハイルハン（Mönkhkhairkhan）文化、テブシ（Tevsh）文化、バイタグ（Baitag）文化の４期に分期してみる見方がある（Kovalev & Erdenebaatar 2009、科瓦列夫・額爾徳涅巴徳爾2009）。しかしこの見方は、時期的な問題は別としても、地域性に考慮がなされておらず、時期的に平行する段階に文化設定されているものもあり、この編年をモンゴル全体に適応することはできない。一方、モンゴル高原の青銅器時代墓葬において、モンゴル高原西部から中部にかけて広がるヘレクスールとモンゴル高原東部から中部にかけての板石墓を同時期に対峙して存在するとするツヴィキタロウフの考え方（Цыбиктаров 1998、Cybiktarov 2003）は、最も妥当なものである。筆者も板石墓の編年の再構築を行うべく、板石墓の墓葬構築構造の型式学的な分類と機能的な変遷方向の説明を、人骨や動物骨

のC14年代測定値などを根拠に証明してきた（宮本2016）。これにより、モンゴル高原西半部のヘレクスールとモンゴル高原東半部の方形墓・撥形墓が対峙している段階から、モンゴル高原東半部では典型的な板石墓が出現・展開することを明らかにした。そして、このような方形墓・撥形墓から板石墓といった墓制によって系統的に変化していく連続した社会を、モンゴル高原東半部の板石墓文化として位置づけている。そして何よりも重要なのは、モンゴル高原東半部の板石墓文化が個人の財産などを誇示した階層構造を持つ社会として知られるのに対し、ヘレクスールは墓の副葬品を持たない等質的社会であることが明らかとなった（宮本2016）。同じようにハニーチャーチは、板石墓文化をウランズーク・テブシ（Ulannzuukh-Tevsh）文化と呼び、モンゴル高原東部の青銅器文化として位置付けている（Haneychurch 2015）。

さて、ヘレクスールとして一括されているモンゴル高原西半部の墓葬内容をあらためて振りかえる必要があろう。既にモンゴル高原東半部の板石墓文化墓制の検討では、墓の構造的な変化を機能論に基づく型式学的変遷の仮説とともに、近年の発掘による古人骨や犠牲獣の炭素年代による年代的な証拠から、その仮説を検証する形で、墓制の変遷を示してきた（宮本2016）。一方、ヘレクスールに関しては近年アムガラントゥグスの編年案が提示されている（Амгалантөгс 2015）。ヘレクスールの型式分類を基に、墓の古人骨を中心とする炭素年代から、墓葬型式の年代的な位置づけを行うものである。本論では、近年の日蒙共同発掘調査によるボル・オボー（Bor Ovoo）遺跡、ヒャル・ヒャラーチ（Khyar Khyaraach）遺跡、エメルト・トルゴイ（Emeelt Tolgoi）遺跡の発掘調査の成果（Miyamoto ed. 2017）を踏まえ、本論ではアムガラントゥグスによるヘレクスールの型式分類を再考する形で、墓制の変遷過程を考えて行きたい。また、モンゴル高原東部から中部の青銅器墓葬を板石墓文化として系統的な変化として捉えたのに対し、モンゴル高原西部から中部に至る青銅器墓制をまとめてヘレクスール文化として捉え、それらを板石墓文化と同じように系統的な墓制の変遷として考え、系統的な人間集団すなわち系統的な社会集団として捉えたい。そして、ヘレクスール文化と板石墓文化の社会集団の歴史的な

叙述を試みたいのである。

２．ヘレクスール文化

ヘレクスールとは、これまで一般的には平面円形の積石塚とその周りを囲む円形あるいは方形の石列による囲みからなるものを指している。この囲いの外側にはさらに石碓と呼ぶ小さな積石が認められる。この石碓の下には一般的に馬の頭骨と蹄が埋置されており、犠牲による墓前祭祀がなされたと考えられている（Allard & Erdenebaatar 2005）。かつてヘレクスールは墓葬というよりは祭祀に係わる石造物と考えられる場合もあったが、近年の発掘で積石塚内部から古人骨が発見される例が増え、墓葬と認識がなされるようになった（Fitzhugh ed. 2005、Takahama et. al 2006、宮本2007）。このような囲い列石をもつ一般的なヘレクスールは、囲い列石が円形であるか方形であるかで大きく区分できる。さらに、近年では、方形列石の四隅に立石を持つものや、同じ四つの立石を円形列石に持つヘレクスールが存在する。これらは、近年サクサイ型式（Гантулга 2016）と呼ばれるものである。日蒙合同調査でも、ゴビ・アルタイ県トンヒル村ヒャル・ヒャラーチ遺跡（Miyamoto. Tajiri et al. 2017）やバヤン・ホンゴール県ボグド村エメルト・トルゴイ遺跡（宮本ほか2018）でこのような墓葬が発見され、発掘調査が為されている。以上がいわゆるこれまでヘレクスールと呼ばれていた墓制であり、典型的なヘレクスールということができるであろう。

ヒャル・ヒャラーチ遺跡やエメルト・トルゴイ遺跡では、このような典型的なヘレクスールとともに、円形墓が存在する。円形墓は円形の縁石で囲まれ、その内側を積石塚上に礫が盛られる場合が多い。コバリエフ・エルデネバートルがムンクハイルハン（Mönkhkhairkhan）文化と呼んだものがこれにあたるであろう。彼らによれば、このムンクハイルハン文化はC14年代が紀元前２千年紀前半で、後に述べる板石墓文化より古い墓制であるとする（Kovalev & Erdenebaatar 2009）。しかし、日蒙合同調査によって発掘されたバヤンホンゴール県ボグド村ボル・オボー遺跡では、典型ヘレクスールとともに円形墓

が出土しているが、その出土人骨の炭素年代は紀元前２千年紀後半にあたり（Miyamoto、Amgalantugs et al. 2017）、典型的ヘレクスールの炭素年代とほぼ同じ時期のものである。したがって、円形墓も、円形ないし方形の囲い石を持たないヘレクスールと考えれば、同じ時期の墓葬とすることができ、同じ墓葬文化に属するとすることができる。そこで、典型的なヘレクスールと円形墓を合わせてヘレクスール文化と呼び、同じ墓葬文化に属するものと考えたい。

一方、サクサイ型式とされる円形ないし方形の囲い石に四つの立石を持つものが存在したが、同じように円形墓においても縁石上に四つの立石をもつものが存在する。この積石塚は円形の縁石からなるもので、その縁石上部に四つの立石を持つものである。四つの立石を囲い石ないし縁石上に持つという意味では、様式的な類似性から同じ時期のものと推定することもできよう。ヒャル・ヒャラーチ遺跡やエメルト・トルゴイ遺跡ではこのような四つの立石を持つ円形墓が存在し、出土人骨の炭素年代も典型的なヘレクスールの年代に相当している。

同じように、ヒャル・ヒャラーチ遺跡やエメルト・トルゴイ遺跡では、方形墓でありながら四隅で四つの立石を持つものが存在する。日蒙合同調査で発掘されたヒャル・ヒャラーチ遺跡１号墓（Miyamoto、Tajiri et al. 2017）では、方形の縁石に四つの立石を持つ構造であるが、墓葬の中心部分が積石塚状に高まっており、積石塚状の部分と縁石の間は薄く礫石が敷き並べられた構造である。まさに、四隅立石を持つ方形の囲い列石からなるヘレクスールにあって、囲い列石部分と積石塚部分が敷石によって連結したと考えれば、方形ヘレクスールの発展型としてこの四隅立石を持つ墓制が出現したと想定できる。実際にヒャル・ヒャラーチ１号墓の人骨の年代は、四隅立石を持つ円形墓であるヒャル・ヒャラーチ20号墓より若干新しい傾向にあるが、ほぼ同じ紀元前２千年紀後半にあり、同時期の墓制とすることができる。これらもやはり同じヘレクスール文化に属するとすることができるであろう。

３．ヘレクスール文化墓葬の分類と変遷

典型ヘレクスール、そして円形墓、さらに四隅立石をもつ典型ヘレクスール・円形墓・方形墓がヘレクスール文化の墓制としてまとめることができる。ヘレクスール文化の墓制に関しては、近年アムガラントゥグスによって分類と編年が行われている（Амгалантөгс 2015）。また、アムガラントゥグスは、近年の発掘調査や分布調査の成果から、ヘレクスール文化墓葬はモンゴル高原西半部を中心にして分布することを明らかにしており、炭素年代から紀元前16世紀から紀元前9世紀ごろまで存続しているとした（Амгалантөгс Ц. 2015）。これはツヴィキタロフが示した分布図（Цыбиктаров 1998）と同じものであると同時に、ヘレクスール文化の主体が西から東へと広がっていることを予想させる。また、この段階はモンゴル高原東半部の方形墓（Ⅰ式）と撥形墓（Ⅲ式）段階に並行する段階であり、ヘレクスール文化墓葬は典型的板石墓段階（Ⅱ式）には消滅している（宮本2016）。

ここではアムガラントゥグスの分類・編年を基に、筆者自らの分類案をまず示すことにする。アムガラントゥグスは、図１にあるように、まず円形タイプ（１式）と方形タイプ（２式）に大別する。円形タイプはさらに五つに細分される。彼の１A、１B、１E式が囲い列石を持つ典型ヘレクスールである。その他の１C・１D式の円形タイプは、囲い列石を持たない円形墓である。アムガラントゥグスは、円形墓をさらに細分するが、筆者が観察したモンゴルの青銅器時代墓葬でいえば、細分された楕円形墓（３式）などは、いわば例外的な存在であり、ここでは細分する必要はないであろう。また、方形タイプでは四隅に立石ないし石碓を持つタイプを、アムガラントゥグスは２B ～２E式に分類している。この他、アムガラントゥグスの4式は出土例が少なく、例外的な存在である。

これらの分類を基に筆者なりに再度分類を試みてみたい。まず、墓葬の全体形態が円形であるか方形であるかを分類の第１基準としたい。第2の分類基準が囲い列石の有無である。第３の分類基準は四隅立石の有無である。これらの

三つの属性の組み合わせを元に分類を示したのが表１である。

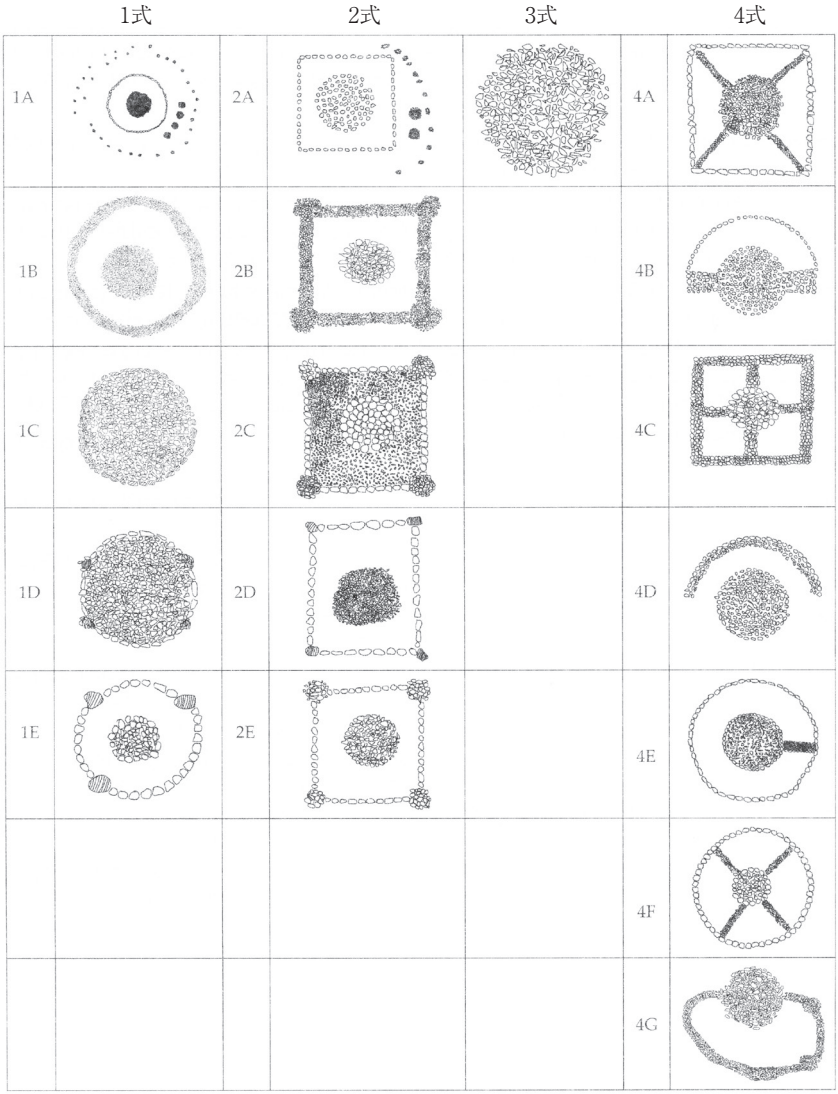


図１　アムガラントゥグスのヘレクスール文化墓葬の分類

円形囲い石	方形囲い石	円形積石塚	方形積石塚	四隅立石	型式名
○	×	○	×	×	Ⅰa
○	×	○	×	○	Ⅰb
×	×	○	×	×	Ⅱa
×	×	○	×	○	Ⅱb
×	○	○	×	×	Ⅲa
×	○	○	×	○	Ⅲb
×	×	×	○	○	Ⅳ

表１　属性組成によるヘレクスール文化墓葬の型式分類

まず墓葬全体の輪郭が円形であるものの内、円形の囲い列石をもつものをⅠ類、囲い列石を持たず円形の積石塚のみからなるものをⅡ類と分類する。Ⅰ類はさらに四隅石の有無により、囲い列石に四隅石を持たないⅠa類（図２－１）、囲い列石に四隅立石を持つものをⅠb類（図２-２）に分類する。Ⅱ類も同じように円形積石塚の縁石に四隅立石を持たないものをⅡa類（図３－１）に、四隅立石を持つものをⅡb類（図３－２）に分類する。

墓葬全体の輪郭が方形を為すものも、方形の囲い列石を持つものをⅢ類とし、方形の積石塚をⅣ類とする。方形の囲い列石を持つもので、囲い列石に四隅列石を持たないⅢa類（図４－１）、囲い列石に四隅列石を持つⅢb類（図４-２）に分類できる。ここでは、囲い列石の四隅に石碓を有するものもⅢa類に含めている。四隅の石碓とヘレクスール周囲の石碓とでは石碓そのものの区別ができないからである。なお、Ⅲa類の囲い列石の四隅の石碓が、四隅立石に変化してⅢb類になる可能性は想定される。一方、Ⅳ類は板石墓の方形墓に類似する形態であるが、基本的な違いとして板石墓には縁石の内部が礫で充填されるのに対し、Ⅳ類は縁石から中心に向かって積石塚状に礫の積み方に高まりが見られる点に違いが求められる。また、現在観察されるもので、このタイプには縁石にすべて四隅立石を持っている（図５）。アムガラントゥグスもヘレクスール文化墓葬の分類（図１）で、氏の分類として2C類と分類しており（Амгалантөгс 2015）、囲い列石を持たないものは四隅立石を持つこのタイプに限られる。

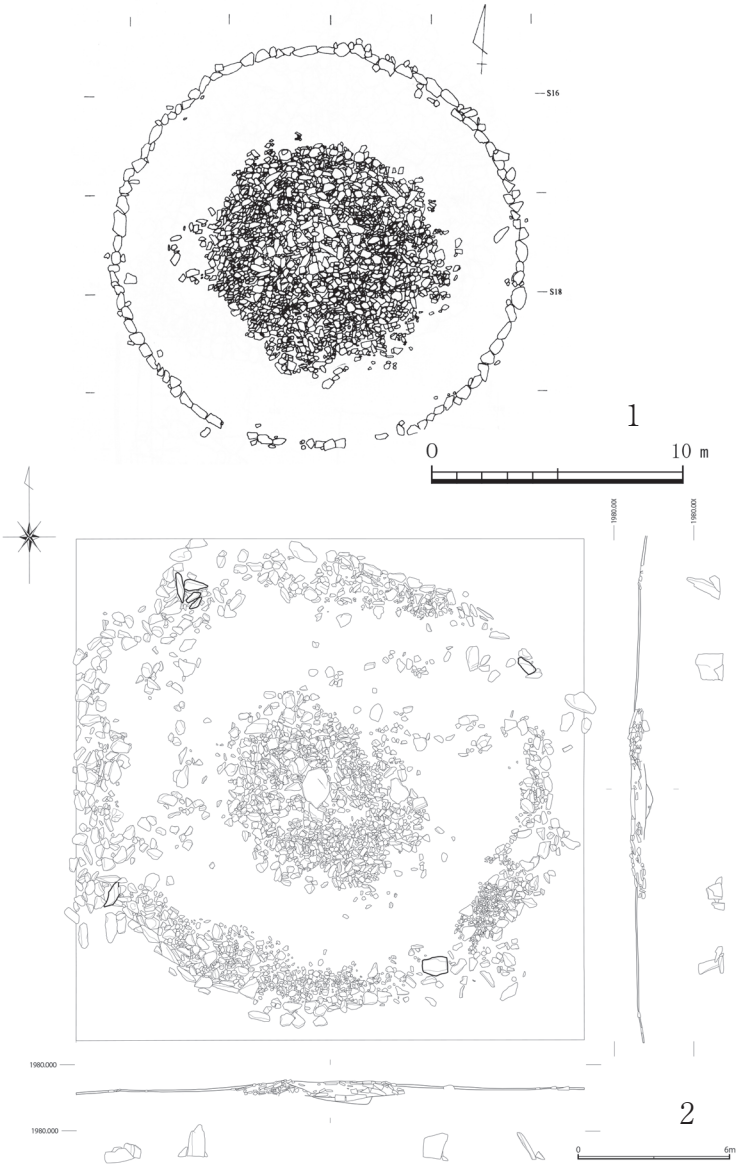


図２　ヘレクスール文化墓葬Ⅰ類
（１：Ⅰa類ウラン・オシーグ12号墓　縮尺1/300、２：Ⅰb類エメルト・トルゴイ30号墓　縮尺1/300）

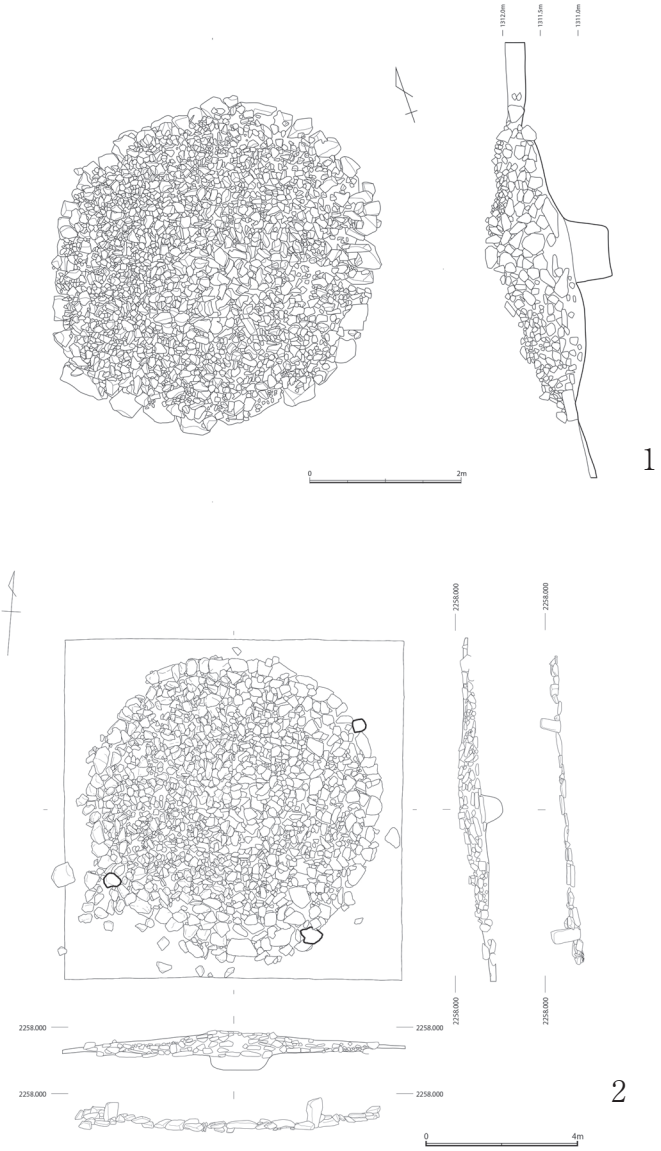
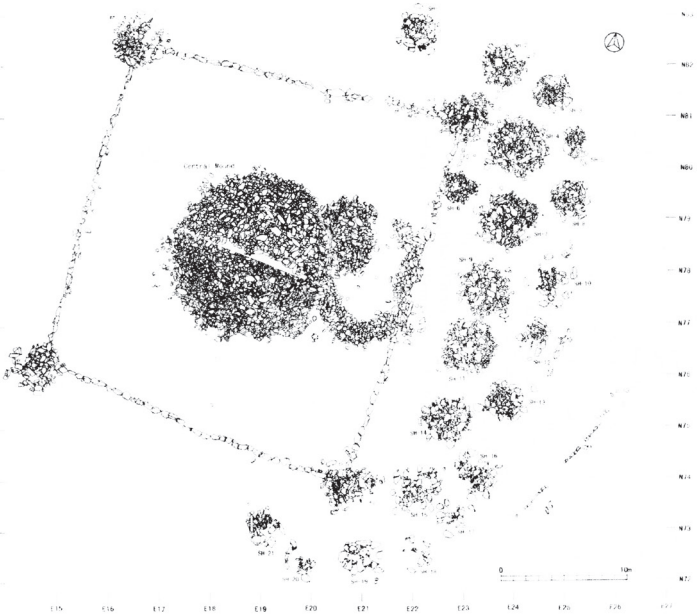


図３　ヘレクスール文化墓葬Ⅱ類
（１：Ⅱａ類ボル・オボー 11号墓　縮尺1/100、２：Ⅱｂ類ヒャル・ヒャラーチ20号墓　縮尺1/200）



2

図４　ヘレクスール文化墓葬Ⅲ類
（１：Ⅲａ類ウランオシーグ１号墓　縮尺1/600、２：Ⅲｂ類エメルト・トルゴイ４号墓）

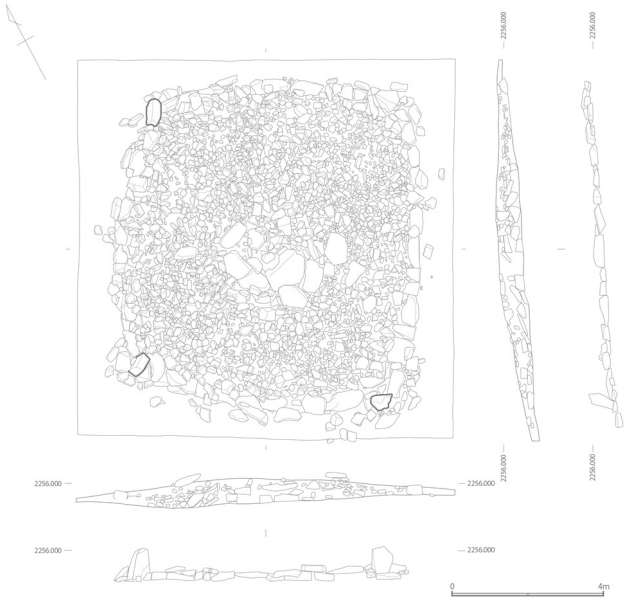


図５　ヘレクスール文化墓葬Ⅳ類（ヒャル・ヒャラーチ１号墓　縮尺1/200）

４．ヘレクスール文化墓葬の編年

アムガラントゥグスの分析によれば、ここでいうⅠ類やⅡ類の全体が円形をなすものが、Ⅲ類やⅣ類などの全体が方形のものに比べ、炭素年代測定値が古い年代を出す傾向にあり（Амгалантөгс 2015）、紀元前16世紀にⅠ・Ⅱ類がまず出現し、その後、紀元前14世紀にⅢ・Ⅳ類が出現するという相対的な年代差が知られている。

日蒙共同発掘調査を行ったヒャル・ヒャラーチ遺跡では、Ⅲb類を除く、Ⅰa類、Ⅰb類、Ⅱa類、Ⅱb類、Ⅲa類、Ⅳ類といったヘレクスール文化墓葬にのみ限られている（Miyamoto, Tajiri et al. 2017）。このうち、Ⅱb類の20号墓の炭素年代は1325 – 1209 cal. BC（2σ、68.8％）、Ⅳ類の１号墓の炭素年代は1306 – 1054 cal. BC（2σ、90.1 ％）、1265calBC - 1108calBC（2σ、94.2%） で

ある[1]。僅かな資料ではあるが、相対的にⅡb類がⅣ類より古い傾向にある。そしてこれらの墓地が、おおよそ紀元前14世紀から11世紀にかけて存続していたと考えられる。

一方、ボル・オボー墓地ではⅠa類、Ⅱa類、Ⅲa類とさらに板石墓文化の撥形墓からなる墓地群である（Miyamoto, Amgalantugus et al. 2017）。ボル・オボー墓地のⅡa類の2号墓は1316 – 1201cal. BC（2σ、77.3％）、同じくⅡa類の13号墓は1397 – 1259 cal. BC（2σ、91.2％）の炭素年代を示している。一方、板石墓は撥形墓Ⅲb式の特徴を示すが、1112 – 974 cal. BC（2σ、91.2％）と明らかにⅡa類より新しい段階のものであると同時に、撥形墓26号墓はⅢa類の7号墓の囲い列石を切って作られており、撥形墓Ⅲb式がⅠa・Ⅱa・Ⅲa類のヘレクスール文化墓葬より新しい段階のものであると考えられる。さらにモンゴル高原西半部を基盤とするヘレクスール文化墓葬のⅠa類、Ⅱa類、Ⅲa類が築造されて後に、撥形墓Ⅲb式がモンゴル高原東部からこのボル・オボー文化へと広がっていったと想定される（Miyamoto, Amgalantugus et al. 2017）。また、ヒャル・ヒャラーチのⅡb類である20号墓の炭素年代と比較すれば、ボル・オボーの2・13号墓のⅡa類の年代は大差がないということができるであろう。すなわち、Ⅱa類とⅡb類はほぼ同時期に存在していた可能性がある。

さらに2016年と2017年に日蒙合同発掘調査によって調査されたバヤン・ホンゴール州エメルト・トルゴイ遺跡は、Ⅰa類、Ⅰb類、Ⅱa類、Ⅱb類、Ⅲa類、Ⅲb類、Ⅳ類、そして板石墓の撥形墓Ⅲb式1基からなる墓地である。墓地構成はヒャル・ヒャラーチ遺跡によく類似しているが、主体はⅠ類とⅡ類であり、Ⅲ類やⅣ類はヒャル・ヒャラーチ遺跡同様に少ない。Ⅱb類の40号墓は1266 – 1125 cal. BC（2σ、95.4%）という炭素年代値が測定された（宮本ほか2018）。ヒャル・ヒャラーチ遺跡の1号墓のⅡb類より若干新しい年代値が検出され、相対的にⅡb類は、Ⅱa類より新しい傾向が示されている。

このように3遺跡の墓葬の炭素年代からは、Ⅰ類とⅡ類の関係は不明であるものの、Ⅱ類よりⅣ類が新しい傾向にあり、さらにⅡa類とⅡb類はほぼ同時期に共存しているが、一方で相対的にⅡb類が新しい傾向にあることが、明ら

かとなった。また、他遺跡の炭素年代からすると、紀元前16世紀に始まる円形のⅠ・Ⅱ類に比べ、紀元前14世紀に始まる方形のⅢ類が新しい傾向にあることが分かっている（Амгалантөгс Ц. 2015）。

さて、ヒャル・ヒャラーチ遺跡は墓群が4地点に分かれており（図６）、地点ごとに墓葬型式の組み合わせに差違が見られる（Miyamoto, Tajiri et al. 2017）。第１地点には大型のⅠa類のみが散在しながら鹿石とともに存在している。第2地点と第3地点には、第１地点に比べ比較的小さなⅠa類やⅠb類が群集している（図６・図７）。また、Ⅰb類は第2地点のみ存在する（図７）。一方で、Ⅱa類とⅡb類は第2地点と第3地点では共存するが、第4地点ではⅡa類のみが存在している（図７）。また第3地点の東半部の分布からは、Ⅰa類とⅡa類は共存する関係にあるということができよう（図６・７）。さらに先に示した炭素年代から年代的に遅れてⅡb類が生まれるとすれば、四隅立石を持つというⅠb類とⅡb類は様式的に共時的関係にあり、Ⅰa・Ⅱa類に続いてⅠb・Ⅱb類が成立したと考えるべきであろう。こうしたⅠa・Ⅱa類とⅠb・Ⅱb類の共

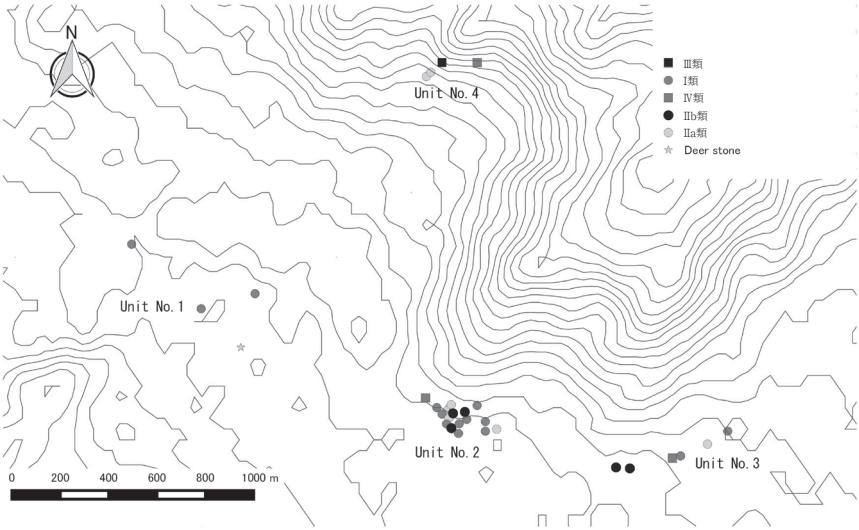


図６　ヒャル・ヒャラーチ遺跡墓葬分布

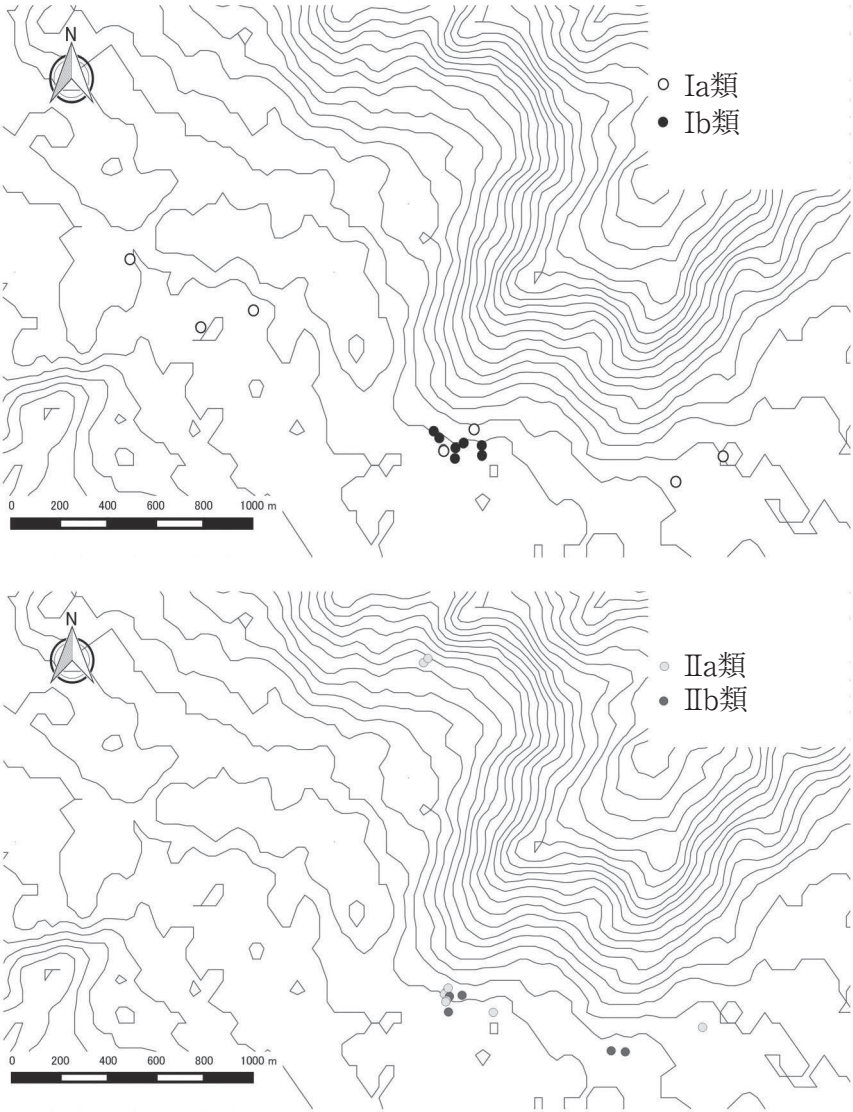
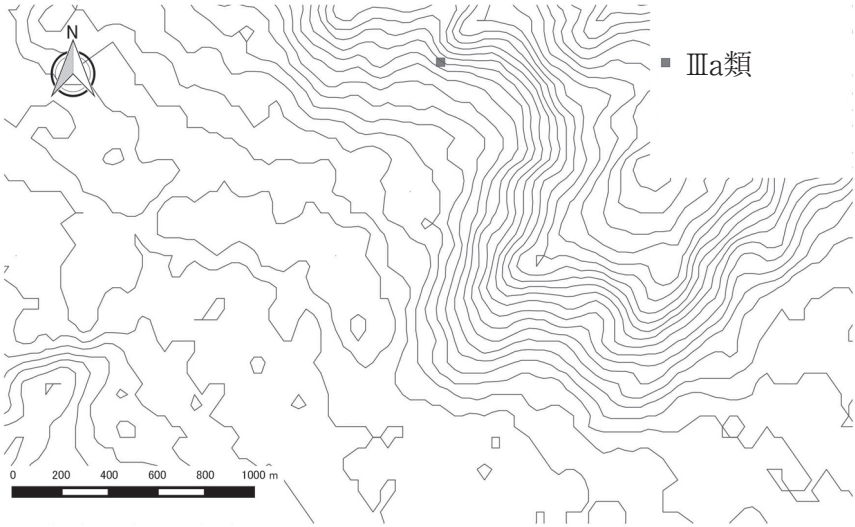


図７　ヒャル・ヒャラーチ遺跡Ⅰ・Ⅱ類墓葬分布

存例は、ヒャル・ヒャラーチ第2地点の分布によく表されている（図６・７）。この場合、平面形が円形のⅠ類とⅡ類は、囲い列石の有無によって区別されるが、その差異は被葬者の力の差などの社会的な意味を背景にしていると想定できる。エメルト・トルゴイ遺跡では、Ⅰb類の30号墓（図2－2）とⅡb類の40号墓が調査されたが、埋葬施設は同じ土壙を呈するものの、Ⅰb類の30号墓の方が土壙が大きいとともに、土壙上面の蓋石が大きかったり、墓壙の大きさが大きいことが判明している。こうしたところからも、囲い列石の有無は、階層差などの社会的な格差を示すものであり、同時期のものと考えていいであろう。さらに、Ⅰa類の中にはヒャル・ヒャラーチ第１地点に見られるように、大型化したものが散在しながら群集している。これは中・小型のⅠa類が、他の地点で他のⅠb類やⅡ類と共存しているように、Ⅰa類が特殊化して、孤立して構築されるに至ったことを示していよう。すなわち社会格差が次第に進展して行く中に、上位階層の中のⅠa類の中でもさらに階層上位者あるいは階層上位の氏族が、独立して墓域を第1地点に移したと想定できるのである。

一方で平面方形のⅢa類は、これらとは排他的にヒャル・ヒャラーチ第4地点のみに分布している（図８）。やはり円形のⅠ・Ⅱ類とⅢ類とでは系統を異にしていることが言えるとともに、炭素年代でも示されたように（Амгалантөгс 2015）、Ⅰ・Ⅱ類より相対的に新しい段階にⅢ類が異なった地域から出現ないし移動してきたものと想定できる。おそらくは同時期のモンゴル高原東部を中心に分布する平面方形ないし長方形の板石墓文化の東から西への広がりを受ける形で、円形主体のⅠ・Ⅱ類墓葬というモンゴル高原西半部において、方形墓主体のモンゴル高原東半部の影響の結果、生まれたのが平面方形主体のⅢ類であったと想定できるのである。さらに、四隅立石をもつ平面方形のⅣ類は、ヒャル・ヒャラーチ第２～第４地点に各１基しか存在しないとともに（図８－２）、各地区墓群の周辺に位置して構築されている（図６）。Ⅳ類は構造的にⅢ類の囲い列石と中心の積石墓部分が連結して、全体を敷石で覆う構造で有り、Ⅲ類の発展型式と想定される。その点でも主体集団であるⅠ・Ⅱ類に対して異系統のⅢa類が遅れてヒャル・ヒャラーチ第４地点に成立し、さら



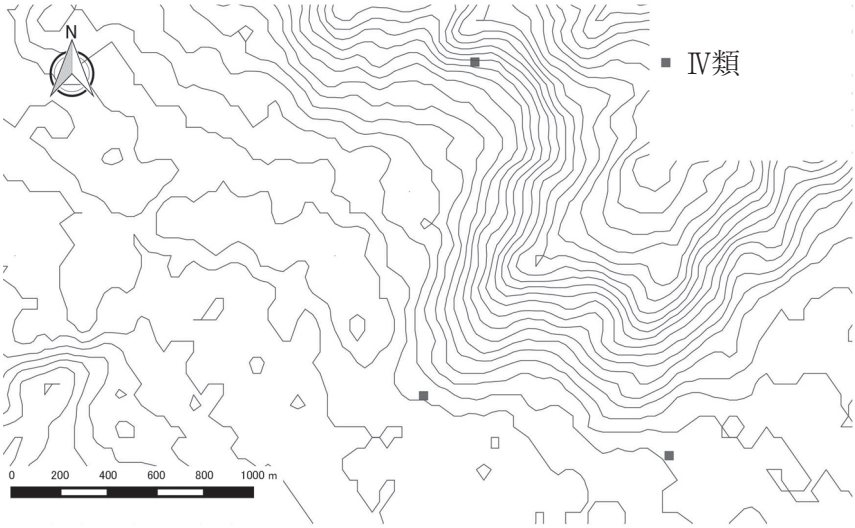


図８　ヒャル・ヒャラーチ遺跡Ⅲ・Ⅳ類墓葬分布

にその系統のⅣ類がヒャル・ヒャラーチ第２～第４地点にそれぞれ形成されていくことになるのである。

また、主体の平面円形であるⅠ・Ⅱ類はより西方に起源を持つ可能性がある。ヒャル・ヒャラーチのⅡb類である30号墓の被葬者は、中央ユーラシアのコーカソイド系の形質を持っており、一方で平面方形のⅣ類である1号墓の被葬者は、古人骨の形質がユーラシア東部のモンゴロイド系であった（Okazaki & Yonemoto 2017）。また、両者の歯牙のストロンチウム分析からは、どちらかが移住者である可能性があり（Yonemoto et. al 2017）、上記の想定のような西から東への移住ないしは東から西への移住が想像される。このことは、平面円形のⅠ・Ⅱ類が西から東へ、さらに平面方形のⅢ・Ⅳ類がモンゴル高原東半部の方形墓や撥形墓との関係の中で生まれてきたものである可能性を高めていよう。

以上に述べてきたヘレクスール文化墓葬の型式変化を示したのが、図９である。円形ヘレクスールであるⅠa類と円形墓であるⅡa類が、それぞれⅠb類・Ⅱb類に変化する。これらがモンゴル高原西半部のヘレクスール文化墓葬の主体である。Ⅰa・Ⅱa類より若干新しい段階に成立する方形ヘレクスールⅢa類は、モンゴル高原東半部の板石墓文化の影響のもとに生まれた可能性がある。この後、Ⅲa類はⅢb類へと変化し、さらにⅣ類を生み出す。

５．モンゴル青銅器時代墓制の展開

すでに考察したことがあるモンゴル高原東部の板石墓文化の墓葬型式の変遷（宮本2016）を再度まとめてみたい。図10にあるのがモンゴル高原東部から中部にかけて分布する板石墓文化の墓葬変遷図である。方形墓である板石墓文化墓葬Ⅰ式は縁石の外側に控え石のないものと控え石があるものに区分し、それぞれをⅠa式とⅠb式に区分する。Ⅰa式は縁石の平面形が方形ないしそれに近い長方形のものからなり、さらにⅠb式は縁石の平面形が長方形からなっており、Ⅰa式からⅠb式といった変化方向が考えられる。炭素年代からはⅠa式は紀元前16～12世紀、Ⅰb式は紀元前15～9世紀にある（宮本2016）。古い段階のⅠa式は近年モンゴル高原東南部で多数発見されており、

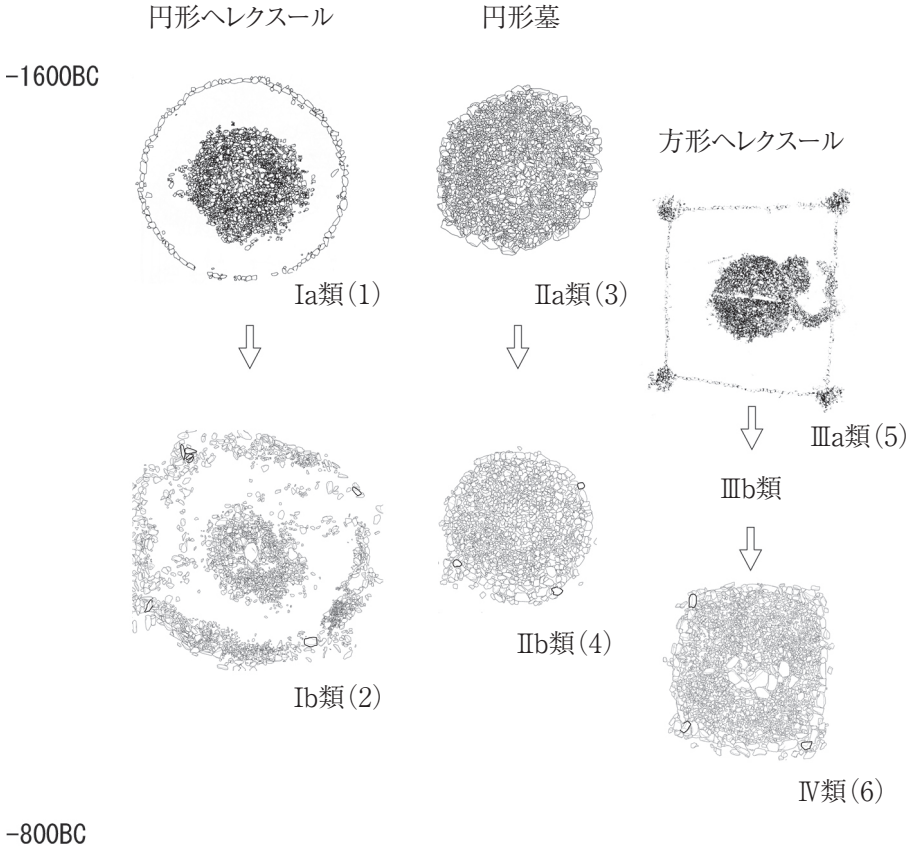


図９　ヘレクスール文化墓葬変遷図
（１ウラン・オシーグ12号墓、２エメルト・トルゴイ30号墓、３ボル・オボー11号墓、
４ヒャル・ヒャラーチ20号墓、５ウラン・オシーグ１号墓、６ヒャル・ヒャラーチ１号墓）

ウランズーク（Ulaanzuukh）文化と呼ばれるものである（Tumen et al. 2014）。その代表的な墓葬は、ウランズークやブルギーン・エク（Түмен et al. 2010、Tumen et al. 2014）、チャンドマン・ハル・オール（Амартувшин et. al 2015）があげられる。これらⅠa式がモンゴル高原東南部に集中し、Ⅰb式がモンゴル高原中部に広がるように認められる。

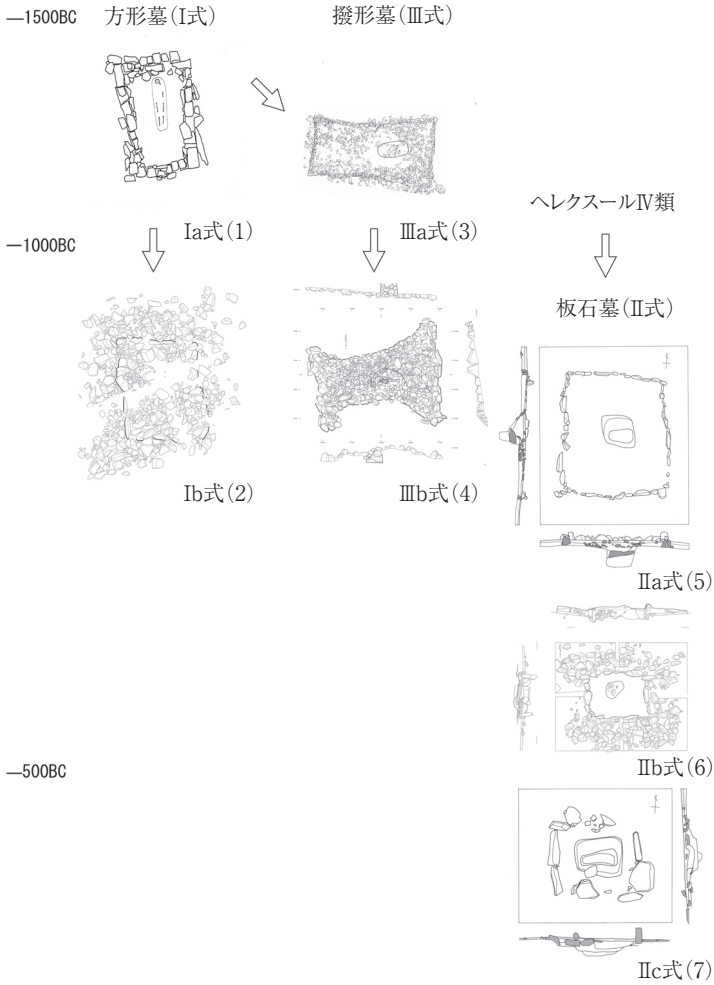


図10　板石墓文化墓葬変遷図
（１ブルギン・エク、２ダーラム９号墓、３チャンドマニィ・ハルウリィン31号墓、
４テヴシ１号墓、５ダーラム４号墓、６ダーラム８号墓、７ダーラム１号墓）

板石墓文化墓葬Ⅲ式の撥形墓は、縁石の長軸と短軸が等しいないしあまり大差のない方形状に近い、あるいは長方形状であるが縁石の長側辺がやや内湾して四隅の突出が激しくないⅢa式、縁石の長軸が短軸より長く伸びて長方形状を呈し、長軸側辺の内湾度が高まることにより四隅の突出が顕著になるものをⅢb式に区分できる。甘粛から内モンゴルの陰山山脈一帯で発見された四隅が方形を呈する井字形の撥形墓（馬健2015）も、このⅢb式の一種である。そして、方形ないし長方形に近いⅢa式から、長側壁の内湾度が高まるⅢb式へと変化したと考えられる。Ⅲa式は紀元前15～12世紀、Ⅲb式は紀元前13～9世紀に存在する（宮本2016）。Ⅲ式は、ツヴィクタロフが作成した分布図によれば、沿バイカルからウブルハンガイ州テブシ遺跡までモンゴル高原中部の南北に広がっている（Цыбиктаров 1998）。さらに内モンゴル中北部の陰山山脈一帯で板石墓が発見されている（馬健2015）。近年の発掘成果を加えるとともに、こうした撥形墓である板石墓文化Ⅲ式の分布を示したのが図11である。その分布の中心がモンゴル高原中部にあることは明確であろう。板石墓文化墓葬Ⅰ

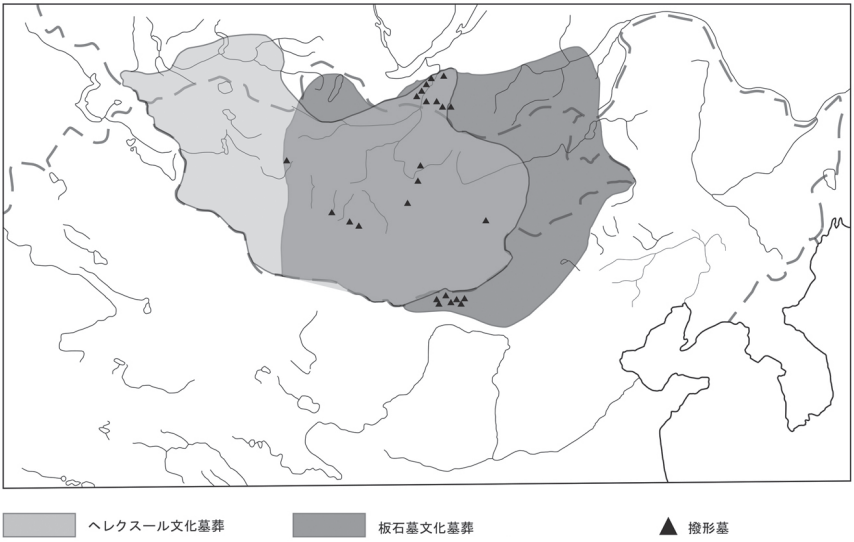


図11　モンゴル青銅器文化の墓葬分布

a式の方形墓の長側壁が内湾したものが撥形墓のⅢa式と考えることは、変化の方向性として型式学的に理解できることである。さらに、モンゴル高原東南部に起源するⅠa式が次第にモンゴル高原中部へ伝播する段階で、モンゴル高原中部においてⅠa式が型式変化したのがⅢa式と考えることができるであろう。しかもⅢ式の分布がロシアの沿バイカルから内モンゴルの陰山山脈に至る非常に広い地域であることが興味深いのである。

一方、モンゴル高原西部では同じ紀元前15～9世紀段階において、ヘレクスール文化の墓制が同時存在している。平面円形のⅠ類・Ⅱ類が先行して出現し、板石墓文化Ⅰ式の影響を受ける形で、平面方形のⅢ類が現れる。そうした段階が紀元前15～12世紀段階とすることができるであろう。そして、こうした平面円形を主体とするヘレクスール文化の墓制は、モンゴル高原の西部に位置するミヌシンスク盆地のオクネボ文化やカラスク文化などの墓制（Legrand 2006）の影響を受ける形で生まれた可能性がある。古人骨の形質学的な特徴からもコーカソイド系が中央ユーラシアからモンゴル高原西部まで移住して来ている可能性については、すでに述べたところであるが、墓葬を含めた文化の動きと人の移動との関係を考えれば、これは西から東の動きとして理解できるであろう。

さて、板石墓文化墓葬Ⅱ式は縁石の平面形は基本的に長方形であり、縁石の四隅が他の縁石より立ち上がる四隅石を持つタイプであり、典型的な板石墓である。Ⅱ式も縁石の外側に控え石を持つタイプと持たないタイプに分けることができ、前者のⅡa式から後者のⅡb式への変化を想定することができる。さらに控え石を持ちながら縁石が相対的に大型化したⅡc式へと変化する（図10）。Ⅱa式は縁石の外側に控え石を持たないものであり、四隅石も比較的低いダーラム４号墓（図10－５）を代表とするものである。これに対し、明確な四隅石を持ち縁石の周りに控え石を持つⅡb式は、ダーラム墓地では最も多いものであり（Miyamoto & Obata ed. 2016）、ダーラム41号墓やダーラム８号墓（図10－６）などがその代表的なものである。さらに、縁石自身が大型化し、縁石全体が高くなるⅡc式は、縁石の周囲の控え石によって構築が可能に

なった構造である。ダーラム１号墓（図10－７）やウラン・オシーグ板石墓1号墓（Takahama et al. 2006）などが代表例であろう。さらに、板石墓文化Ⅱ式は、板石墓文化Ⅰ・Ⅲ式がほとんど副葬品がなかったのに対し、土器、石製装身具、青銅装身具などの副葬品を一般的に持つことが特徴としてあげることができ、前段階に比べより個人の社会的な格差が広がっていった段階として理解できる（宮本2016）。

さて、こうした場合、典型的な板石墓であるⅡ式の成立が問題になる。方形区画で四隅石があり、周りに控え石を配置しないⅡa式が最も古いものであり、周りに控え石を持たないということでは、こうした墓葬の出自を板石墓文化Ⅰa式やⅢa式に求めざるを得ない。しかし、そこには年代的な時間差があるだけでなく、板石墓文化Ⅱa式に特徴的な四隅石が板石墓文化Ⅰa式やⅢa式から成立するといった因果性が存在しない。すなわち、Ⅰa式やⅢa式からは四隅石が出現していくという説明の型式学的な根拠が見いだせないのである。

一方で、ヘレクスール文化墓制において比較的新しい段階に出現する方形であるⅣ類には、四隅石に相当する四隅の立石が存在している。方形の縁石の四隅に立石を持つヘレクスール４類が、形態的に板石墓文化Ⅱa式に最も近いものである。すでに述べたヒャル・ヒャラーチ１号墓は、8.0×9.0ｍの方形墓で四隅石を持っている。出土人骨の炭素年代は1306－1054 cal. BC（90.1%, 2σ）と1265－1108 cal. BC（94.2%, 2σ）である（Miyamoto, Tajiri et al. 2017）。また、フヴスグル県ツァヴガンジン・ウラン・オール2号墓では、4.3×4.0ｍの方形墓でありながら四隅に立石を持ち、出土古人骨の炭素年代は1267-993 cal. BCで、ヘレクスール文化墓葬Ⅳ類である（Амгалантөгс et al. 2007）。また、ツァヴガンジン・ウラン・オール１号墓やサルヒィミン・ハル・ハブ３号など（Амгалантөгс et al. 2007）も、四隅立石をもつ方形の囲い石からなるヘレクスールⅣ類である。さらに、モンゴル高原西北部のフヴスグル県フブル・ゴル村ウラーン・トルゴイ（Ulaan Tolgoi）遺跡（Fitzhugh ed. 2005, p. 66, Fig.5.9a）にも見られ、ヘレクスールⅣ類の分布の中心はモンゴル高原西北部にある可能

性がある。これらヘレクスールⅣ類は上円下方墳のような構造をなしており、四隅立石をもつヘレクスールⅢb類の中心の積石塚部分と方形の囲い列石部分が石敷きで連結することによってできあがったものと考えられる。これらをかつてプロト板石墓と述べたように（宮本2016）、板石墓文化墓葬Ⅱa式の直接の祖形と考えることができる。

一方で、板石墓文化墓葬Ⅱa式に類似した墓葬構造、とりわけ四隅石と方形の区画石を持ち控え石を持たないⅡa式に最も類似したものは、ミヌシンスク地域のタガール文化期の最も古い段階にあるバイノフ期（Грязнов et al. 1980、Bokovenko 2006）の墓葬構造に近い。この時期のものは基本的に板石墓文化墓葬Ⅱa式の構造と同じであり、かつ墓壙も地下にあり1枚の蓋石で覆われることもある。こうした場合、ミヌシンスク盆地から内蒙古東部までの広い地域に板石墓が広がっているとすることができるが、それは板石墓の初段階のみであり、少なくともその後はミヌシンスク盆地とモンゴル高原中・東部の板石墓の変化方向は異なるものであった。また、ミヌシンスク盆地のバイノフ期は紀元前10～8世紀とされている（Bokovenko 2006）。グリャズノフがカラスク期からタガール期の移行期としてまとめたバイノフ期は、ラザレトフによれば二つに分かれることができ、タガール文化末期段階のものと、バイノフ期のものに分かれる。そして後者のバイノフ期は、カザフスタンあるいはモンゴル高原西部から文化的な波及によるものとする（Лазаретов 2007）。この考えによれば、モンゴル高原西北部を中心として分布するヘレクスール文化墓葬Ⅳ類が、バイノフ期の方形墓で四隅石を持つ墓葬構造をもたらした可能性が高いであろう。ヘレクスール文化墓葬Ⅳ類がおおよそ紀元前14～11世紀であり、ミヌシンスクのバイノフ期に連続することになる。一方で、モンゴル高原中・東部の板石墓の初期段階である紀元前8世紀の板石墓文化墓葬Ⅱa式よりヘレクスール文化墓葬Ⅳ類は古いものであり、その間には時間差が存在している。モンゴル高原の西部から東部へとヘレクスール文化墓葬Ⅳ類が広がりながら、板石墓文化墓葬Ⅱa式に変化していったものと想定することができるであろう。

６．まとめ

モンゴル高原の青銅器時代は、ミヌシンスク地域や長城地帯を含み、大きくカラスク文化からタガール文化へと大きく動いていく。その段階のモンゴル高原は、同じ青銅器文化でありながら、出土青銅器が少ないことから考古学的な青銅器そのものの分析に困難を生じていた。この度は、モンゴル高原の青銅器時代墓葬を自ら調査することにより、墓制の変遷から青銅器時代の文化動態を描き出そうとした。モンゴル高原はこれまで西部のヘレクスール文化と東部の板石墓文化に分かれることが示されてきたが、その墓制の動きをより詳細にトレースすることに成功したのである。すなわち、モンゴル青銅器時代前半期のカラスク文化期においては、モンゴル高原西部においては、ヘレクスール文化墓制Ⅰ～Ⅳ類が存在するが、その主体はⅠ・Ⅱ類であり、Ⅲ・Ⅳ類はやや遅れてモンゴル高原東部の板石墓文化との関係で生まれた可能性がある。そのⅠ・Ⅱ類は中央ユーラシアからの影響の中で、西から東への動きの中で生まれたものである。そしてまたⅠ類とⅡ類あるいはⅢ類とⅣ類の構造差は、被葬者の社会的な位置づけの差やあるいは氏族の系統差に基づくものである。また、そうした社会間格差が次第にヘレクスール文化内でも生まれていっている。そしてモンゴル高原東部に発する板石墓文化は、カラスク文化期にはモンゴル高原東南部に起源する方形墓のⅠ式からモンゴル高原中部において変容する撥形墓のⅢ式というように、変化していく。こうしたモンゴル高原西部のヘレクスール文化の西から東への動きと、モンゴル高原東部の板石墓文化の東から西への動きは、カラスク文化の青銅器の動態にも現れており（松本2009)、墓制と青銅器の斉一的な文化動態として理解できよう。すなわちカラスク文化期のモンゴル高原内での大きく二つの社会集団が東西方向へ互いに影響を与え合っていたとすることができるのである。

カラスク文化からタガール文化への展開は、連続した変化というように理解することも可能であるが、文化内容には大きな差違が見られる。こうした文化変動をもたらす原因の一つが、紀元前9世紀代に認められる一時的な寒冷期で

ある（Geel et. al 2004）。紀元前8世紀にタガール文化という新しい青銅器文化のユーラシア東部での広がりに合わせる形で、ヘレクスール文化墓葬Ⅳ類から典型的板石墓である板石墓文化墓葬Ⅱa式が広がり、その後はモンゴル高原東部においてに典型板石墓がⅡa式→Ⅱb式→Ⅱc式へと変遷を示している。なお、ミヌシンスク地域のタガール文化の墓葬についてはやや複雑な過程を経る。すでに指摘したタガール文化初期の紀元前10～8世紀のバイノフ期に、ヘレクスール文化墓葬Ⅳ類の影響を受けてバイノフ期の墓葬が成立している。

モンゴル高原タガール文化期の典型板石墓文化には、副葬品がカラスク段階のヘレクスール文化墓葬や板石墓文化墓葬Ⅰ式・Ⅲ式とは異なり、副葬品の多寡差すなわち社会的な格差が広がっていく。カラスク文化期が氏族単位での格差がある程度広がっていったのに対し（Wright 2014）、タガール文化期には次第に個人での社会的な格差が広がっていったものと推定できる（宮本2016）。ブルガン県エギン・ゴル川流域からは板石墓に青銅冑が副葬され（Erdenebaatar 2004）、ダーラム4号墓からは多量の玉と銅泡が副葬されたように（Miyamoto & Obata ed. 2016）、典型的板石墓の板石墓文化墓葬Ⅱ式段階から個人の副葬品の多寡に示される集団内での個人の階層差が進展している。この現象は、ミヌシンスク地域のタガール文化期のポドゴルノエ（Podgornoe）期やサルガシュ（Saragash）期においても、墓葬規模や構造の拡大にも表されている（高濱1999）。同じようにこの段階にモンゴル高原西部に広がるチャンドマニ文化（Gorsdorf et al. 1998）は木槨墓や木棺墓を中心に展開する。おそらくはトゥバのアルジャン古墳やアルタイのパジリク文化の影響のもとチャンドマニ文化が生まれたものであると考えられる。

本稿は、平成27年度～平成30年度日本学術振興会科学研究費基盤研究（A）「ユーラシア東部草原地帯における騎馬遊牧社会形成過程の総合的研究（課題番号：15H02608）」（代表：宮本一夫）の研究成果の一部である。

注

（1） 発掘報告書（Miyamoto, Tajiri et al 2017, p29）では、後者の年代測定値が異なっている。これは誤植であり、本数値が正しい。

参考文献

日本語

高濱秀　1999 「大興安嶺からアルタイまで―中央ユーラシアの考古学」同成社、53-136頁

松本圭太　2009 「カラスク式短剣の成立と展開」『古代文化』61巻第1号、37-55頁

宮本一夫　2007 「漢と匈奴の国家形成と周辺地域－農耕社会と遊牧社会の成立－」『九州大学21世紀COEプログラム「東アジアと日本：交流と変容」統括ワークショップ報告書』、111-121頁

宮本一夫　2016 「モンゴル高原における青銅器時代板石墓の変遷と展開」『史淵』第153輯、31-57頁

宮本一夫・田尻義了・松本圭太・T.Amgalantugs・D.Bazargur　2018 「モンゴル国バヤンホンゴール県エメルト・トルゴイ遺跡の発掘調査」『第17回北アジア調査研究会報告会』北アジア調査研究報告会実行委員会、1-4頁

英語・独語

Allard, Francis. & Erdenebaatar, Diimaajav. 2005 Khirigssurs, ritual and mobility in the Bronze Age of Mongolia. In *Antiquity* 79: pp.547-563.

Bokovenko Nikolay. A. 2006 The emergence of the Tagar culture. In *Antiquity* 80（310）pp. 860-879.

Cybiktarov A. D. 2003 Central Asia in the Bronze and Early Iron Ages（Problems of Ethno-Cultural History of Mongolia and the Southern Trans-Baikal Region in the Middle 2nd – Early 1st Millennia BC）. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 1（13）, pp. 80-96.

Erdenebaatar D. 2004 Burial materials related to the history of the Bronze Age in the territory of Mongolia. In Linduff K. M. ed., *Metallurgy in Ancient Eastern Eurasia from the Urals to the Yellow River*, the Edwin Kellen Press, Lewiston.

Fitzhugh William ed. 2005 *The Deer Stone Project Anthropological Studies in Mongolia 2002-2004*. Arctic Studies Center National Museum of History Smithsonian Institution, Washington D. C., National Museum of Mongolian History, Ulaanbaatatr.

Geel B. van, Bokovenko N. A., Burova N. D., Chugunov K. V., Dergachev V. A., Dirksen V. G., Kulkova M., Naglef A., Parzinger H., Plicht J. van der, Vasiliev S. S., Zaitseva G. I. 2004 Climate change and the expansion of the Scythian culture after 850 BC: a hypothesis, *Journal of Archeological Science* 31.pp. 1735-1742.

Gorsdorf Jochen, Parzinger Hermann, Nagler Anatoni & Leont'ev Nikolaj.1998 Neue ^{14}C-Datierungen fur die Sibirische Steppe und ihre Konsequenzen fur die regionale Bronzezeitchronologie. In *EURASIA ANTIQUA* Band 4, pp. 73-80, Berlin, Germany.

Haneychurch William 2015 Inner Asia and Spatial Politics of Empire Archaeology, Mobility, and Culture Contact, New York, Springer.

Kovalev Alexei A. & Erdenebaatar. Diimazhav 2009 Discovery of New Cultures of the Bronze Age in Mongolia according to the Data obtained by the International Central Asian Archaeological Expedition. In J. Bemmann H. Parzinger, E. Pohl, D. Tseveendorzh ed. *Current Archaeological Research in Mongolia, Papers from the First International Conference on "Archaeological Research in Mongolia" held in Ulaanbaatar, August 19th-23rd, 2007*. Rheinsishe Friedriheh-Wilhelms-Universität: 104-117.

Legrand Sophie 2006 The Emergence of the Scythians: Bronze Age to Iron Age in South Siberia. *Antiquity* 80（310）: 843-859.

Miyamoto Kazuo, Amgalantugus Tend & Delgermaa Lhagvadorj 2017 Excavations at Bor Ovoo Site, *Excavations at Bor Ovoo and Khyar Kharaach Sites*, Faculty of Humanities, Kyushu University: 55-65.

Miyamoto Kazuo, Tajiri Yoshinori, Amgalantugs Tsend, Batbold Natsag & Delgermaa Lhagvadorj 2017 Excavations at the Khyar Kharaach Site, *Excavations at Bor Ovoo and Khyar Kharaach Sites*, Faculty of Humanities, Kyushu University: 25-54.

Miyamoto Kazuo ed. 2017 *Excavations at Bor Ovoo and Khyar Kharaach Sites*, Faculty of Humanities, Kyushu University.

Miyamoto Kazuo & Obata, Hiroki ed. 2016 *Excavations at Daram and Tevsh Sites*, Faculty of Humanities, Kyushu University.

Nicola Di Cosmo 2002 Ancient China and its enemies: the rise of normadic power in East Asia, Cambridge University Press, Cambridge, UK.

Okazaki Kenji & Yonemoto Shiori 2017 Human skeletal remains of the Bronze Age unearthed from the both sites of Khyar Kharaach in the Govi- Altai Province and Bor Ovoo in the Bayankhongor Province, Mongolia . In *Excavations at Bor Ovoo and Khyar Kharaachi Sites*: 55-65.

Takahama Shu, Hayashi Toshio, Kawamata Masanori, Masubara Ryuji & Erdenebaatar D. 2006 Preliminary Report of the Archaeological Investigations in Ulaan Uushig Ⅰ（Uushigiin Övör）in Mongolia, 金沢大学考古学紀要 28:61-102.

Tumen Dashtseveg, Khatanbaatar Dorjpurev, Erdene Myagmar 2014 Bronze Age Graves in the Delgerkhaan Mountain Area of Eastern Mongolia and the Ulaanzuukh Culture. In *Asian Archaeology*, Vol.2, Science Press, Beijing: 40 -49.

Wright Joshua 2014 Landscapes of Inequality? A Critique of Monumental Hierarchy in the Mongolian Bronze. In *Asian Perspectives*, 51（2）: 139-163.

Yonemoto S., Adachi T., Funahashi K., Nakano N. and Osanai Y. 2017 The Strontium analysis on the human skeletal remains from the Khyar Kharaach site in the Gobi Altai, Mongolia. In *Excavations at Bor Ovoo and Khyar Kharaachi Sites*: 66-72.

ロシア語・モンゴル語

Амартувшин Ч., Батболд, Н. Эрдэнэ Г., Батдалд Б.2015 *Чандманъ Харуулын археологийн дурсгал*. Үлаанбаатар.

Амгалантөгс Ц. 2015 Хиргисүүрийн гадаад хэльэр, ззохион байгуу лалтын ангилал. *АРХЕОЛОГЙН СҮДЛАЛ* 1-41, Үлаанбаатар: 122-139.

Амгалантөгс Ц., Эрдэнэ Б., Прохлич Б., Хант Д. 2007 Умард монголд явуулсан археологийн судалгаа. *АРХЕОЛОГЙН СҮДЛАЛ* 1-25, pp. 106-130, Үлаанбаатар.

Цыбиктаров А. Д. 1998 *КУПЬТУРА ПЛИТОЧНЫХ МОГИЛ МОНГОЛИИ И ЗАБАЙКАЛЬЯ*, Улан-Уде.

Ерөөл-Эрдэнэ Ч., Гантулга Ж., Бемманн Я., Броссөдөр У., Макглынн ж., Рөйхерт 2015 Орхоны хөндий дэх Монгол-Гарманы хамтарсан “Баркор” төслийн судалгааны урьдчилсан үр дүн. *АРХЕОЛОГЙН СҮДЛАЛ* 1-41, Үлаанбаатар: 198-227.

Гантулга Ж. *2016 Сагсай хэлбэрийн булж, Монголын Эртний Булш Оршуулга Ⅲ*, Үлаанбаатар: 56-62.

Грязнов М. П., Завитухина М.П., М. Н. Комарова, Миняев С. С., Пшеницына, Хубяков Ю. С. 1980 *Комплекс Археологических Памятников у Горы Тепсей на Енисее*, Наука, Новосибирск.

Ковалев А. А., Эрдэнебатар Д. 2012 Чемурчекский Купытурный феномен Исспедования последних лет, Санст-Петербург.

Лазаретов И. П. 2007 Памятники баиновского типа и тагарская культура. *Археологические вести* 14, pp. 93-105, Наука.

Түмен Д., Эрдэнэ М., Хатанбаатар Д., Анхсанаа Г., Ванчигдаш Ч. 2010 “Дорнод Монгол” төслийн хүрээнд гүйцэтгэсэн археологийн судалгаа（2010）. Mongolian Journal of Anthropology, Archaeology and Ethnology 6（1）, Үлаанбаатар: 167-215.

中国語

Ａ・Ａ・科瓦列夫、Д・額爾徳涅巴徳爾2009「蒙古青銅時代文化的新発現」『辺疆考古研究』第８輯、246-279頁、科学出版社

馬健　2015 「内蒙古陰山地区早期石版墓的初歩調査与研究」『中国北方及蒙古、貝加爾、西伯里亜地区古代文化（上）』278-286頁、科学出版社